

Virginia Woolf の *The Waves* について

—個性化の過程と意識と無意識—

石田 美佐江

岡山理科大学電子工学科

(2001年11月1日 受理)

「人間とは何か」を解明するターニングポイントとも言うべき理論が、19世紀後半から20世紀初頭にかけてあいついで登場した。それは、Charles Darwin(1809-1882)の進化論であり、それに影響を受けたと考えられる Sigmund Freud(1856-1939)の精神分析理論である。Freudの始めたこの理論は、1920年代はじめにフランスの詩人 André Breton(1896-1966)によって提唱され国際的に花開いた文学・芸術運動であるシュルレアリスムの理論にも繋がっている。このシュルレアリスムは、18世紀末から19世紀前半にかけてヨーロッパ各地で広まったロマン主義の再生ともいえるようなものであった。ロマン主義は、イギリスでは William Wordsworth(1770-1850)や Samuel Taylor Coleridge(1772-1834)が中心になって運動を展開し、*The Waves*に何度もその名が登場する George Gordon Byron(1788-1824)もまたそのような運動の中心となった一人であった。Woolfは、1929年に書き始めた *The Waves* を書き直す過程で、Wordsworthの *Prelude* のある部分をわざわざ彼女の日記に記している。これらの事柄は、*The Waves* を書く時点で Woolf がロマン主義文学に関心をもっていたことを明らかに示している。Woolf は19世紀後半のリアリズムには批判的であった。よって、1931年に完成された *The Waves* がシュルレアリスムの流れの中にあっただとしても不思議なことではない。また、このことから、Freudのはじめた精神分析理論が何らかの形で *The Waves* に影響を及ぼしているともいえることができるであろう。

Woolf が *The Waves* を完成させた1931年が、歴史的には第一次世界大戦と第二次世界大戦の狭間の時期であることもこの作品を分析するにあたっての重要な事柄である。第一次世界大戦後は、世界政治におけるヨーロッパの地位は低下し、アメリカおよび旧ソ連が台頭し、反植民地運動が活発化した。イタリアでは1922年にムッソリーニ内閣が成立し、第二次世界大戦を引き起こすことになるムッソリーニのファシズムとヒトラーのナチズムが台頭してきていた時代でもあった。*The Waves* の中でも、登場人物の一人である Louis が “...I have yet heard rumors of wars...” (71) と語る部分がある。また、経済的にも1929年に世界恐慌はじまっており、第一次世界大戦によって19世紀の国際秩序の崩壊を目の当たりにした人々の不安は高まっていたのではないかと考えられる。特に、Woolf は1882年に生まれ、ほぼ帝国主義の発展の時代とともに成長しており、人生の頂とも言える30代で第一次世界大戦を迎えている。よって、Woolf は、自分の人生とイギリス社会の変貌がシンクロナイズしていることを実感していたのかもしれないと考えられる。

このように、戦間期の文学的及び社会的な影響のもとに *The Waves* は創造されている。また、作品構成に関しては、「一つの人生より幾つかの人生を一緒にした時どうなるかに関心があって、それを一つの物語にしようと思う」(森 訳、p.314)と Woolf 自身が述べているように、6人の人物、Bernard、Louis、Neville、Susan、Rhoda、Jinny を登場させ、“soliloquies” という形式でそれぞれに語らせるという手法により、全体としては6人の登場人物の人生を9つの段階に分け、幼年期から中年期に至るまでの人生の物語を一つの作品として結実させたものである。そして、この6人の語りの合間に、*To the Lighthouse* (1927) の ‘Time Passes’ ですでに取り入れられた散文詩のような技法を用い、「間奏曲」に類するような部分が挿入されている。この部分には、太陽の運行と波の干潮とそれらとともに変化するその他の自然の様子が詩的に描かれており、6人の人生の過程を暗示するものとなっている。

The Waves は、Woolf のこれまでの作品と同様に「生」と「死」とそれに続く「再生」のテーマを扱っているが、よりヒトの「個」としての「生」と「種」としての「生」について考えさせる作品であると私は考

える。*The Waves* の最近の批評としては、ポストコロニアル的視点からの反帝国主義的テキストとしての読みが目に付くが、本稿では帝国主義というイデオロギーを生み出した根底にある心理に目を向け、人間の「個性化の過程」とそれに付随する象徴と「意識」と「無意識」の関係について精神分析的視座からの分析を試みる。6人それぞれについて特徴的な事柄について分析していくことにする。

まず最初に Louis をとりあげてみよう。

幼年期の彼は、自分が草のようにあちこちに根を広げていくようなイメージを抱き、植物との同化傾向を示している。このことは、後に彼が “a full-grown man” (127) となり、世界をまたにかけのビジネスマンへと変貌をとげること、あるいは人間が発達するにしたがって、肉体的にはその活動範囲が広がり、心理的にはより深みのある自我の確立した人間へと成長することを暗示したものだと考えられる。彼がその独自の自我を確立させ自己を完成させる「個性化」の道を歩む際に重要な要素がある。それは、彼がその人生において繰り返し述べることだが、彼の父親が Brisbane の銀行家であり彼にはオーストラリアなまりがあるということである。このことは、Carl Gustav Jung (1875-1961) が言う意味での Louis のコンプレックスになっており、彼がもつ心の複雑性の要因となっている。彼は、登場人物6人の中では唯一イギリス本国生まれではなく、生まれた時から “alien” (70) であり “external” (70) であるという宿命を背負っている。彼が、彼にはクリスマスプレゼントがないことに気づいたある女性がクリスマスツリーのてっぺんからイギリス国旗をくれたことを屈辱だと感じるように、彼はたえず自分のこの出自に過敏な神経を尖らせている。それで、学校教育、それは、イギリス文化を継承する者をつくりだすための教育であるが、その教育を受けることで彼はイギリス人に同化しようとする。彼は学校時代の終わりには、“Above all, we have inherited traditions.” (42) と語り、彼の学校時代に感謝する。よって、Louis はイギリス生まれの者以上に過剰に学校教育に適応する。学校時代の彼は、“Now all is laid by his authority, his crucifix, and I feel come over me the sense of the earth under me, and my roots going down and down till they wrap themselves round some hardness at the centre.” (25) と、キリスト教の権威に基づいたイギリスの伝統的な学校教育の中での安定性あるいは秩序に身をゆだねる。彼は、“I am an average Englishman;” (69) だと主張し、イギリス人としての自分を強調するが、それはかえって、彼がもつ「影」の部分、つまり彼が “stains” や “old defilements” と呼ぶものを抑圧することにほかならない。

また、Louis の父親が銀行家であるということも彼にコンプレックスをもたせる原因のひとつになっている。Susan の父親は牧師であり、Bernard と Neville の父親はジェントルマンである。階級が違う上に彼の父親は破産してしまった。これらのことが彼にとっては負い目になっている。よって、Bernard と Neville は大学に進んだが、彼は学校を終えた後よるべきものもなく無秩序な現実社会へ出て行くことになる。彼は、現実社会のなかで父親の失敗を乗り越えるために金もうけにはげまざるを得ない。彼は、“The weight of the world is on our shoulders;” (129) と語り、成人した男性に人間社会が要求する役割について意識し、“My task, my burden, has always been greater than other people's. A pyramid has been set on my shoulders.” (154) と語り、自分に課せられた運命が他の者よりも過酷であることを吐露している。しかしながら、彼は経済社会での成功を象徴する「肱掛椅子とラグ」を受け継ぐために仕事にはげみ、その結果として人生で職業的な成功をおさめるのだった。

ところで、この Louis は幼年期より不思議なヴィジョンをもっている。それは、“A great beast's foot is chained. It stamps, and stamps, and stamps.” (5) と Louis が語るように、大きな獣が足を踏み鳴らすイメージであり、“I see women passing with red pitchers to the river;” (7) と語るように、女たちが川に赤い水差しを運んで行くイメージである。このヴィジョンは、繰り返し彼の中に浮かんでくる。この何度も繰り返されるイメージの出現は、何を意味しているのであろうか。私は、これは人間の「意識」の深く、「個人無意識」のさらに深くにある Jung が提唱する「普遍的無意識」の顕現であると考ええる。Jung は、Freud が「古代の残存物」と呼んでいた、夢に共通して現れるある種のイメージについて、それは「非常に遠い昔から人間の心に残ってきた心理的な要素」(ユング、61) であり、「人間の身体が、長い進化的な歴史を背景に持っている器官の博物館をなしているように、心も同様な方法で構成されていると期待すべきであろう」と述べている。この考え方について、『精神分析学辞典』の「個体発生と系統発生」を参照すると、生物学における「個体発生は系統発生を繰り返す」という定式を人間の心理的発達に応用すれば、「現代の幼い子供たちの空想や精神的特性と、概して原始時代の種族の特性だったと推測されるものとの間には、広範囲にわた

る類似性が存在している」という結論をださざるをえないとライクロフトは説明している。Woolf もまた、*The Waves* の中でこの「個体発生と系統発生」の考えを示そうとしているのではないかと私は考える。Louis の心の奥には、ヒトという「種」が受け継いできた「普遍的無意識」の領域が存在する。Louis が抱く「足を踏み鳴らす大きな獣」のイメージは、この「普遍的無意識」を表しており、それは「野生性」を帯びている。また、女たちが川に赤い水差しを運んで行くイメージは、儀式的な「聖性」を帯びている。

Jung は、彼の著『人間と象徴』の中で、人間は文明の状態に到達するまで意識を徐々に確立させてきたが、それはまだ完全ではなく、統合されているとは言えないと人間の心の進化過程について説明している。そして、一見すると、近代の文明社会は「合理性」により「制御」されているが、「文明化の過程において、われわれはその意識を人間の心の深い本能的な層からますます分離させ、そして、ついには心理現象の身体的基礎からさえも分離させるにいたった」と述べている。オーストラリア育ちの Louis がイギリス本国で伝統的教育を受け、帝国主義時代の先兵のように、世界を航路で結んで経済での植民地化を推し進めていることは、もともと野蛮な心性をもっていたヒトが、文明化するにつれて野蛮な心の領域を「合理性」の名のもとにどんどん制圧していることを意味している。このことは、Louis という「個」の心の中のみ傾向ではなく、実は「個」が集まった「集団」のなかにも同様に見出される。というのも、この心の進化が「帝国主義」というイデオロギーとなって、植民地支配へと繋がったのである。「国家」という「個」の「集団」は、「未開国」とみなすインドをはじめとする国々を文明化しようとする。しかし、そうしようとすることで逆にもともと文明人の心の奥底にあった「野蛮性」が揺り動かされ、結局は「戦争」という形で文明国は自らの「野蛮性」を露呈することになったのである。

ところで、再び Louis という「個」の「生」に立ち戻ると、彼は仕事に没頭することで「無意識」の部分を断ち切ろうとするのだが、実は私的な生活では変わらず屋根裏部屋に住み、そこから下町の日常の光景を目にし、一編の詩を読みふけり、下町の人々に親近感をもつという生活を送っている。このことは、彼が仕事により「意識」の強化をはかる一方で、「無意識」にあるものを大事にしていることの表われである。このことと、もう一つ彼は夢の世界に生きる Rhoda と恋人関係であることで、結果的には、彼は全体的な心のバランスを保っているのである。

では次に、この Rhoda について考えてみよう。Louis が “conspirators” (107) と二人の関係を呼ぶように彼が Rhoda とつながっているのは、Rhoda には彼のコンプレックスを刺激する父親がいないことが一つの理由であり、また別の理由としては、彼女もまた「女性性」の点で Susan や Jinny に劣等感を抱いていることである。このように、彼らはお互いの中に同質性を見出しているのである。だが、Rhoda は結局 Louis の抱擁を受容することができず、Louis とは別れてしまう。つまり、彼女は、男性性すなわち Jung が言うアニムス的な要素を受け入れずことができず、自己の完成をすることなく自殺してしまうのである。

Rhoda は、“I dream; I dream.” (33) と自ら語るように、「夢」の世界にとどまっていて、魂の純粋性を守るあまり、その発達過程で女性としての「肉体」をもつ現実を直視し「時間」の流れの中で生きることができない。彼女は、算数の時間に Miss Hudson によってだされた問題の答えが分からず、時計を見ながら自分が時間の環の外に永遠に閉め出されていると感じる。このような Rhoda を見て、Louis は、彼女は「他の人たちのような肉体をもっていないのだ」と語る。Jinny が、“I do not ..., or lie, like Rhoda, crumpled among the ferns, ...” (30) と語るように、Rhoda は、「羊歯」が繁茂する原始社会の心の状態、すなわち未分化な段階にとどまったままであり、「羊歯」が象徴する幻想の世界に生きている。それゆえ、“That is my face, ... in the looking-glass behind Susan's shoulder—that face is my face. But I will duck behind her to hide it, for I am not here. I have no face. Other people have faces; Susan and Jinny have faces; they are here. Their world is the real world.” (31) と Rhoda 自身が語るように、Rhoda には「顔がない」し、「現実の世界」に生きている実感もない。

それでは、Rhoda が繰り返し語る、この「顔がない」とは一体どういうことであろうか。顔は、ある人間を別の人間と識別するために肉体の中では、最も重要な部分である。その「顔がない」ことは、結局は人間と人間の識別ができないということにつながる。つまり、識別できうような「個」がないということである。学校に入った Rhoda は、“But here I am nobody. I have no face. This great company, all dressed in brown serge, has robbed me of my identity.” (23-24) と語り、生徒が皆同じ服を着ているために集団の中に「個」が埋没してしまっている状態をやはり「顔がない」と表現した。Rhoda は、ロンドンという文明社会の人ごみに埋もれてしまって「個」を確立することができず、いつも漠とした不安に漂い、虚無感の中で目的がな

く生きる近代人の代表ともいえる存在である。

この「肉体」をもたない霊的世界を夢見る Rhoda とは対照的な人物として、Jinny の存在が挙げられる。Jinny は、草の茂みの中にいた Louis の首筋にキスをして Louis の自我を目覚めさせた子供の頃から中年期に至るまで、一貫して「肉体」、すなわちエロスに生きているといっても過言ではない。彼女は、自分の顔が鏡に映ることを嫌った Rhoda とは逆に、“I hate the small looking-glass on the stairs, ... It shows our heads only; it cuts off our heads. And my lips are too wide, and my eyes are too close together; I show my gums too much when I laugh.” (29-30) と、彼女が劣等感をもつ顔だけしか映らない小さな鏡を嫌い、体の全身が映る鏡を愛する。彼女の「生」の実感は、肉体的な運動をすることで得ることができるエクスタシーと「肉体」に付随する「性」がもたらすエクスタシーによってのみ彼女にもたらされる。

Jinny の人生観は、“There is nothing staid, nothing settled, in this universe. All is rippling, all is dancing; all is quickness and triumph.” (33) と語るように、宇宙には永続するものなどなく全てが動いているとするものである。それゆえ、彼女は、いつも踊っているように活動的な、そして一つの場所に、一人の人にとどまることのない人生を送る。

では、Jinny はなぜこのように「肉体」すなわちエロスに没頭する人生を送るのだろうか。その理由を分析してみると、彼女が “I hate darkness and sleep and night, ...” (40) と語る点に鍵が隠されている。「暗闇」と「眠り」と「夜」、これらはどれも「死」あるいは「無意識」を暗示している。前述の Jinny の言葉は、彼女が学校を卒業して社交界にデビューしようという時期に語られたものであるから、「生」の盛りの時期にあっては、それらのことを嫌うのも当然のことかもしれないが、実際には、彼女はこの時期に限らず、「死」や「無意識」を拒絶している。二十歳前半で「生」の盛りの時期には、Jinny は “All is real; all is firm without shadow or illusion. Beauty rides our brows. There is mine, there is Susan's. Our flesh is firm and cool. Our differences are clear-cut as the shadows of rocks in full sunlight.” (106) と、「光」と「影」の二分化のイメージを用いて自我の確立をはっきり述べているように、彼女の心の中では「意識」と「無意識」がはっきり二分化されており、彼女は「意識」の世界に生きている。

また、Jinny は中年期になって、ロンドンの地下鉄の駅にある鏡に映った自分の姿を見て、一瞬若さの喪失を認めるが気をとらななし、未開人たちがメーキャップをすることで「悪霊」から身を守ろうとするように、相変わらず「顔におしろいをはたき、唇を赤く塗ることで」(149)、「老い」や「死」から自分の「肉体」を守り、「無意識」の侵入から「意識」の領域を守る。そして、“I am a native of this world, I follow its banners.” (149) あるいは、“I march forward.” (150) と決意のほどを示すように、「老い」とそれに続く「死」を思い煩う代わりに、“This is the triumphant procession; this is the army of victory with banners and brass eagles and heads crowned with laurel-leaves won in the battler. They are better than savages in loin-cloth, and women whose hair is dank, whose long breasts sag, with children tugging at their loin breasts.” (149) と、文明化された社会に生きる人間としてあくまでも文明を信じ、現実の「生」を力強く生きぬこうとするのである。

次に、Neville について考えてみることにしよう。彼のことで特筆すべき点は、彼がエリート養成男子校時代以来 Percival にたいして同性愛的な感情を抱いていることである。元来彼は肉体的にはひ弱で、男子校のリーダー的存在であった Percival に自分が持たない男性性の側面を投影して、あこがれのような感情を彼に抱くのである。“But without Percival there is no solidity. We are silhouettes, hollow phantoms moving mistily without a background” (91) と語るように、この Percival に対する気持ちが強いがゆえに、Neville は Percival の死に際しては、“All is over.” (114) と述べるほど、ショックを受け落胆する。彼は、Percival はイギリスを背負って立つような人物になれたかもしれないという無念さをもち、決して来ることのない Percival の未来を想像し、その喪失を嘆く。そして、Percival という「光」の死によって、Neville の未来ばかりか過去までも非現実に変容してしまう。

ところで、この Percival という人間は、Neville だけに影響を与えているわけではない。*The Waves* においては、Percival はまさしく重要な象徴的な役割を担っている。Percival についてわかることは、身体的特徴として彼の鼻はまっすぐで彼の目が青いことである。また、Neville が “He is remote from us all in a pagan universe.” (25) と語るように、彼は皆にとってその内面に踏み込めないような遠い存在であり、Louis が “Look now, how everybody follows Percival. He is heavy.” (26) と語るように 威厳を感じさせる存在なのである。このように、Percival については、彼の「人間性」を示すようなエピソードが *The Waves* の中

で多く語られることはなく、そのことがまた彼の「英雄」性を高めている。

Percival がその存在感を読者に感じさせるのは、インドへ赴くことになった彼のために送別会が6人によって開かれるパートと彼のインドでの落馬死のニュースが6人にもたらされ、それぞれがショックをうけるシーンである。Percival の存在は、学校時代から皆に秩序を与え、ばらばらな存在を一つにまとめあげるような役割を果たしている。よって、各所に散らばっていた6人はPercival の名の下に集まり「合一」の瞬間をもつことができたのである。このことは、Percival を待つ6人が坐るテーブルの上の花瓶にさされた「赤いカーネーション」で象徴的に表象される。Bernardによれば、このカーネーションは「7つの面をもった」花であり、“...a whole flower to which every eye brings its own contribution.” (95)とも描写される。ちなみに、このカーネーションは、『イメージシンボル事典』によれば、coronation＝戴冠に由来する言葉であり、「虫の居所の悪かったディアナが、羊飼いの目をくり抜き投げ捨てると、そこからカーネーションがはえた」という逸話がある。ギリシア・ローマ神話に詳しいWoolfは、「合一性」に「神性」をもたせるために、また、この逸話をもとに「目」との関連性においてカーネーションを用いたのではないかと推測する。彼女の日記に“I shall have the two different currents—the moths flying along; the flower upright in the centre; a perpetual crumbling & renewing of the plant.” (228)と書いているように、*The Waves* を書くにあたって「花」を中心にもってくることを彼女はあらかじめ決めていたようである。

この点については、*Mrs Dalloway* においては赤い薔薇がやはり象徴的に用いられていたことを考えあわせると、植物の「生」と「死」と「再生」を人間の「生」と「死」と「再生」に重ねてWoolfは人生を捉えていることがわかる。赤いカーネーションは、なかでも「生」を象徴するものとなっている。Percival自身が「生の盛り」そのものを体現しており、そのPercivalのインドにおける落馬死は、「生」に潜む「死」の冷厳な現実を表すものである。送別会にやってくるPercivalを6人が待つシーンで、RhodaやLouisによって野蛮人たちがおどりを踊りすみを投げたりする儀式のようなヴィジョンが語られるが、これはPercivalを歓迎するインドという「野蛮国」の儀式であると同時に、Percivalの「死」を暗示する「死」の踊りの儀式となっている。Louisはまた“Death is woven in with the violets, ...” (106)と語るが、violetsは『イメージシンボル事典』によれば、「悲しみ、死の花」であり、実際Percivalの「死」に際しRhodaが彼の死を悼んで手向ける花である。すでにこの送別の時点でPercivalには死が織り込まれているのである。

「生」と「死」と「再生」があることは、自然界において当たり前の事実である。しかしながら、高度な文明を発展させて進化してきた人間は、この事実を自然に受け止めたり、実感することがますます難しくなっている。次に取り上げるSusanは、文明国イギリスに生きる6人の中では最も「自然」に近い人物である。Susanは、“All is false; all is meretricious.” (23)あるいは、“I would bury the whole school.” (32)と語るほど、自由を拘束し生活感のないスイスでの学校生活を嫌い、“I will not send my children nor spend a night all my life in London. Here in this vast station everything echoes and booms hollowly.” (45)と、都会の空虚さを嫌い、彼女の父親がいる田舎での素朴で家庭的な人生を選択する。Susanにとっては、“the men in these fields are doing real things;” (45)と、田舎の生活こそが現実感のある生活であり、“I think I am the field, I am the barn, I am the trees; mine are the flocks of birds... (72)と「自然」に同化した生活に価値を置いている。“I shall have children;...I shall be like my mother,” (73)と、Susanは思春期より子供をもつこと、彼女の母親のようになることを志向しており、学校を卒業したSusanは実際に農夫と結婚し子供をもつことになる。Susanが歌う“Sleep, sleep...” (130)という歌は、聖母マリアが歌う子守り歌のようであり、Susanに聖母のような「母性」を感じさせる。しかしその一方で、“but am all spun to a fine thread round the cradle, wrapping in a cocoon made of my own blood the delicate limbs of my baby. Sleep, I say, and feel within me uprush some wilder, darker violence, so that I would fell down with one blow any intruder, any snatcher, who should break into this room and wake the sleeper.” (130-1)と、子宮とそこにいる赤ちゃんのイメージによって母性は生々しく表現され、また母性がもつ動物的で荒々しい野蛮な側面をのぞかせる。この母性が見せる二面性は、Susanが幼少期にLouisにキスをするJinnyを見た時から彼女が抱く「愛」と「憎しみ」を彷彿とさせる。また、母性の二面性と同様に、Susanは農婦としての平凡な幸せに潜む二面性についても実は認識している。Susanは、妻として母として“I have reached the summit of my desires.” (145)と語り、「安全と所有と親密さ」(146)に報われた平和で生産的な生活を送っているが、“I am fenced in, planted here like one of my own trees.” (146)と語るように、それは「囲い込まれることで守られている」生活であり、平凡なしあわせに飽きている自分がいることに気がついてい

るのだ。

最後に Bernard の「個性化の過程」について考えてみよう。

子供の頃の Bernard は、物語を創るという個性をすでにこの時期から発揮していて、大人の国エルブドンに対して子供たちの秘密の世界を創り出す。その世界では、自分たちを「巨人」(16)になぞらえ、「ごっこ遊び」に興じている。そのような彼の自意識の目覚めは、Mrs. Constable が湯に浸したスポンジを頭上から絞り出し、湯が背筋を流れる感覚が彼の両脇腹を走った時に始まる。やがて、Bernard は幼少時代に別れをつけ、親からも別れなければならない時期をむかえる。Bernard は、次々と句を作ることに没頭することで、感情を断ち切るすべを学ぶ。学校を終了した Bernard は、Neville とともに大学へ進学する。この頃になると、Bernard は、他人が一緒にいる時と一人でいる時の自分の違いを認識し、自分という存在が単一ではなく複雑な存在であることを確信する。“For I am more selves than Neville thinks.” (66) と語るように、多面体からなる自分を確信している。Percival を送るために London へ向かった Bernard には、London が何か母性的な有機体のように感じられ、自分が乗っている列車が London に向かって突き進む姿に、投げつけられる砲弾が爆発するイメージを重ねてもつ。これは、文明都市 London が有機物と同様に変化を免れないこと、そして危うさを内包していることを彼が無意識のうちに感じていることの表われである。Bernard は、文明都市 London が実は多くの屍の上に成り立っていることに思いをはせる。彼は、またその中で子供を持つことについての意味を考える。そして、彼は「個」の「生」が次の世代の「生」につながることで「永遠性」をもつことに気がつくのである。だが、その「生」の連鎖の中で「自分とは何だろうか」と彼は考えはじめる。Bernard は、Percival の送別のために 6 人が集まったことを人生の過程におけるつかの間の止まり木のように感じる。そして、その送別会の後に再び彼らはそれぞれの人生を歩み出す。中年期にさしかかった Bernard は、青春を失ったことに気づき、自分には思っていたほどの才能がなかったことを悟る。可能性が一つまた一つと減っていくことへの哀しみと共に、Bernard は、まだ真の「物語」を見つけていないことにたいしてあせりを感じはじめるのである。そして、この中年期の真っ直中に、若かりし頃の Percival の送別会以来再び Bernard を含む 6 人はハンプトン離宮で会うことになり、Bernard は 6 人で並んで歩きながら、人生のはかなさを思い知るのである。こうして、*The Waves* の最後のパートで Bernard はようやく自分も含めた 6 人の人生についてまとめあげ、それを一つの「物語」として完成し、冷厳な「死」という現実に向かって挑むのである。

以上のように、*The Waves* は、6 人それぞれの「個性化の過程」について扱った作品である。Bernard が、“our white wax was streaked and stained by each of these differently. Louis was disgusted by the nature of human flesh; Rhoda by our cruelty; Susan could not share; Neville wanted order; Jinny love; and so on.” (186) と語るように、6 人の個性はそれぞれ異なった形であられるが、「時間」の流れの中で、「赤いカーネーション」が象徴するように一瞬「合一」の存在となってその「自己」の存在感を示す。人間は、多面性をもつ「個」として自らを保存し、またこのことが「種」を保存することすなわち「永遠性」につながっている。人間の進化は、肉体のみならず精神の変化も内包しており、それは「個」のみならず「個」が集まった「集団」の中にも顕われる。Louis が心の奥に「普遍的無意識」があることを示したように、人間の心には「個」を越えて共通するものがある。これによって、人間はある意味でそれぞれがつながっており、作品中で語られるように、一人の人間が多くの「生」を生きている。しかしながら、現実生活において人間はこの「無意識」を切り捨てる形で「意識」の部分を拡大させ、「理性」を信じ「野生性」を否定し文明化してきた。さらに、自国のみならず「野蛮国」を文明化しようと乗り出した。これが、「帝国主義」というイデオロギーをうみだすことになった。ところが、「野蛮国」を文明化しようとしたことで、逆に心の奥に抑圧してきた「無意識」が「意識」の表層に浮かび上がり、文明人は心の中にある暗部を知ることになる。この文明人の心の中をもまた「個」の心とあわせて Woolf は *The Waves* の中で 6 人の「語り」を通して描いてみせる。つまるところ、*The Waves* は、「個」の「心」の発達過程と同時に「個」の「集合体」の「精神」とさらには「種」としての「ヒト」の「心」を描いた作品と評価することができるのである。

Works cited

Woolf, Virginia. edited by James M. Haule and Philip H. Smith, Jr. *The Waves*. Blackwell Publishers, 1993

Woolf, Virginia. *The Waves*. Penguin Books, 1992

Woolf Virginia. Ed. Anne Olivier Bell. *The Diary of Virginia Woolf, 5 vols.* Hogarth Press, 1977-84.

- ウルフ・バージニア 川本静子訳 『波』 みすず書房 1999 年
 フリース・アト・ド 山下主一郎主幹 『イメージシンボル事典』 大修館書店 1995 年
 ユング・C・G 河合隼雄監訳 『人間と象徴 上・下』 河出書房新社 1995 年
 ゴードン・リンダル 森静子訳 『ヴァージニア・ウルフ』 平凡社 1998 年
 ライクロフト・チャールズ 山口泰司訳 『精神分析学辞典』 河出書房新社 1995 年

Virginia Woolf's *The Waves*

—Individuation, the Conscious and the Unconscious—

Misae ISHIDA

Department of Electronics Engineering, Faculty of Engineering
 Okayama University of Science
 Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan
 (Received November 1, 2001)

In this paper, my purpose is to analyze one of Virginia Woolf's representative works, *The Waves*, from the viewpoint of psychoanalysis. This novel was written in 1931, between World War I and II. After World War I, Europe had less power in the world and the anti-colonialism movement had developed. In the arts, Surréalisme, which the French poet André Breton(1896-1966) started, began to flourish worldwide. This artistic movement was, as it were, a revival of Romanticism, which spread in the late 19th century and early 20th century. Its early ideas were conceived by Breton but influenced by Freud's theory, the Unconscious. *The Waves* drifts with these historical and artistic currents and is also influenced by psychoanalysis. Psychoanalysis was started by Sigmund Freud(1856-1939), and had a great influence on the understanding of human beings. Freud's work was continued by many psychologists, including Carl Gustav Jung(1875-1961) who cooperated with Freud in the development of psychoanalysis. But finally, Jung disputed Freud's theory and started his own "analytical psychology". He found that the visions of mental patients had many patterns in common with myths and named them "archtype". He supposed that human beings' unconsciousness consisted of two parts—the personal unconscious and the collective unconscious. The former is the forgotten or the depressed consciousness while "archtype" represents the latter. In *The Waves* we can find this idea. *The Waves* consists of nine parts which include poetic prose and six characters' soliloquies. It mainly tells about their lives from childhood to death. Here we can also observe "individuation" which Jung conceived. As Bernard, one of the six characters, comments on the others' lives, "Louis was disgusted by the nature of human flesh; Rhoda by our cruelty; Susan could not share; Neville wanted order; Jinny love." Thus I propose my reading of this novel using mainly Jung's theory.